

江古田小校長室便り 「温故創新」

H30(2018)・0310 NO108

校長 伊波喜一

一日の糧を求めて 働きて 詩(うた)につづるは 生きる証か
誰にも、将来が見通せず鬱々とする時があります。(この先、どうなるのか。どうしていったらいいのか)。考えても結論が出ず、同じところをぐるぐる回っている。そんな時に会ったのが、新川さんでした。格別のパフォーマンスをするわけでもなく、素朴な語り口でした。ちょっと遠くを見ているような眼差しに、気持ちが穏やかになりました。あれから、随分経ちました。もしあの時この詩にふれなかったら、私は違う人生を歩んでいたかも知れません。

生きる理由

新川 和江

数えつくせない この春ひらくつぼみの ーりんーりんを
若いうぐいすの胸毛の いっぽんいっぽんを
だからわたしは 今日も生きている そうして明日も

歌いつくせない 喜びの歌 悲しみの歌 そのひとふしひとふしを
世界じゅうの子供たち ひとりひとりの子守歌を
だからわたしは 今日も生きている そうして明日も

歩きつくせない 人類未踏の秘境どころか
いま住んでいる この小さな町の いくつかの路地裏さえも
だからわたしは 今日も生きている
そうして明日も

汲みつくせない 底のない桶を あてがわれているわけでもないのに
他人の涙 私の涙 この世にあふれる水のすべてを
だからわたしは 今日も生きている そうして明日も

愛しつくせない 昨日も愛した ー昨日も愛した
けれどもまだ 口いっぱいにはしてあげられない あのひとを
だからわたしは 今日も生きている そうして明日も